

E. F. Westrum, Jr. 教授講演会報告

(東大工) 高橋 洋 一

標記の Westrum 教授講演会が、東京大学原子力研究総合センター会議室において10月26日(月)午後開催された。Westrum 教授(米国ミシガン大)は化学熱力学、とくにカロリメトリー分野での精力的な研究と500篇近い論文に示される業績で著名であり、熱測定学会とのかかわりも、1966年の第2回熱測定討論会に海外よりの最初の招待講演者として来日されて以来、陰に陽に学会活動に協力されて来て居られる。

今回の来日は、CODATA(理工学におけるデータ委員会)の極東地区ワーキンググループ会合に出席されるためのもので、来日の計画が決まるのがおくれたため準備の日時が十分ではなかったが、せっかくの機会だから、とあえて講演をお願いし、快諾を得たものである。

本講演会は、東京大学原子力研究総合センターとの共催の形になり、演題も下記のような雄大なものであった。

“The Engineer and CODATA versus Thermodynamic / Nuclear / Materials Databases”

講演は、1960年代のはじめの原子力材料分野でのデータアセスメント活動がその後のCODATAへの発展の端緒となったこと、特に1962年にIAEAがU,Pu-C系のデータアセスメントのためのパネルをウィーンで開催し、東大(当時)の向坊教授(現原子力委員長代理)や当時IAEAのScientific Secretaryをつとめていた原礼之助博士(現セイコー電子社長)らとホットな論議をして推奨データをまとめられたことをなつかしそ

に触れられた。その後の化学熱力学データ活動についてもサーベイがあった後、もっとも新しいCODATAの活動成果として、新しく刊行された「CODATA Thermodynamic Tables」(Ed. D. Garrin, V. B. Parker, H. J. White, Jr.)の紹介があり、今回の巻は試行的にカルシウム化合物がとりあげられているが、今後はcomprehensive seriesにしてゆく計画であることが述べられた。

講演の後半では、データ評価の具体的な例が述べられ、特に固体物質の低温熱容量の温度依存性を定量的に記述するモデルについて、新しい解析方法を提示された。この解析モデルは、最近のWestrum研究室の研究成果であるが、これについては最近までWestrum研究室に留学されていた駒田紀一氏(現東京電力(株))の寄与が極めて大きく、立派な成果である、と激賞された。(私事にわたるが、駒田氏は東大原子力工学科の私の研究室の卒業生であり、私としても大変名誉なことであった。)

講演終了後も、Westrum教授を囲んで、いろいろな方々からさかんな論議があり、最後は本郷通りの由緒あるおでんや「のんき」で心ゆくまでおでんを賞味され、Westrum教授も大変満足されたようであった。

先にも述べたように、準備期間がほとんどなかったため、アナウンスも熱測定討論会(10月12日~14日)の席で行なったのみであったが、多数の熱心な聴講者を集っていただくことができ、有益な会合であったことを報告し、関係者の方々に御礼を申しあげる次第である。